

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：23503

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23730527

研究課題名(和文) 自立支援を実現する介護技術教育に関する実践的研究

研究課題名(英文) A study of the care skill education to promote accomplishment of the ability of the care receiver to the maximum.

研究代表者

伊藤 健次 (ITO, Kenji)

山梨県立大学・人間福祉学部・講師

研究者番号：70405116

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：自立支援型の介助技術を理解し身に付ける教育手法を開発するために、介助動作と自立動作を撮影し、動作解析ソフトウェアを用いて介助動作と自立動作を比較する動作解析画像を作成した。それらの画像を用いて、介護技術の教科書に掲載されている介助技法を自立動作と比較検証し、自立を支援する動作介助方法を理解するための基礎教育用動画を作成し、動作介助時のコツを視覚的に示したモデル研修プログラムを作成した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop technique of the care skill education that will promote accomplishment of the ability of the care receiver to the maximum. I photographed assisted motion and human natural motion and made the motion analysis images which compared the assisted motion with the human natural motion using motion analysis software. Using those images, I compared the human natural motion with the motion that received a motion assist listed by a textbook, I made an animation for basic care skill education to understand a motion assistance method to promote accomplishment of the ability of the care receiver to the maximum and made the model training program that showed an important point at the time of the motion assistance.

研究分野：高齢者介護

キーワード：動作解析画像 動作介助教育 介護技術の習得 コツの視覚化 介護実務者教育

1. 研究開始当初の背景

高齢者援助をはじめとする介護の実践現場では、施設から地域生活へという流れが強まり、重度かつ長期化する障害への対応と、単純な「お世話」にとどまらず、多様な価値観と生きがいを支える質の高い援助を地域で実施することが求められている。自宅で生活する要介護者を家族が介護するケースも増加し、老々介護や独身の子どもが老齢の親を介護することはもはや珍しくなくなっている。つまりは多様な介護ニーズをもつ要介護者が増え、介護の専門職はより高度な自立支援の技術を要求され、さらには、家族介護者等、専門職以外でも身体介助技術（以下介助技術と略す）を身につける必要がある人が増えている。さらに、介護人材の不足は高齢化のいっそうの進展と共に拍車がかかり、常勤・非常勤を問わず離職率が高い状態が続き、介護職の中核を担うことが期待される介護福祉士のうち、介護職として従事している者は約半数程度に止まる。一般の企業活動においても家族の介護を理由とした退職が年間10万人と推測され、特に40・50代のベテランの退職は企業活動への影響も無視できない。これらの流れは高齢化の進展と介護保険制度の改訂によって、さらに強まりつつある。

こうした状況下で、介護人材の質的な面への対応としては、高度な能力を求める声に対応する形で平成21年度から新しい介護福祉士養成カリキュラムが導入され、自立支援を基盤理念とした教育体制が整えられた。このカリキュラム改定により、技術教育科目は大幅に増加し、介護福祉士という専門職教育のうえで大きな比率を占めることとなった。しかし、自立支援という理念を具体化する介助技術について、どのような教育を行えば理念を実現してゆく実践力を習得できるのか？という切実な課題は未解決のままである。また、量的な側面からも介護人材への参入や潜在的有資格者の再就業の促進、離職者向けの介護資格取得へのサポートが行われているが、こうした新たに介護を行う人材やブランクのある人材に対してもより高度な、自立を支援する介助技術を習得させる教育手法の必要性が高まっている。

2. 研究の目的

本研究では、自立支援型の移乗介助技術を学習者自らの気づきをもとに理解し、身に付けていく教育手法を開発することを目的とした。実施者の身体感覚のみに頼った従来の「教え込み型」教育方法や力任せの介助方法からの脱却をめざし、人が普段無意識に行っている合理的で安全な動作、つまりは自立動作を介助動作の適正さを測る指標として用いて、自立動作と介助者の援助の結果導かれ

た動作とを、動作解析画像を活用することで比較検証し、自ら気づきながら自立支援のための移乗介助技術を身につけていく新たな教育モデルの開発を目指す。

具体的には以下の三点を実施することで目的達成をはかる。1.現在行われている介助技法の検証、2.自立支援という理念とその介助方法を理解するための基礎教育用動画の作成、3.頭で理解したことを実施できるようにする「わかる」を「出来る」にするレッスンモデルの試作

3. 研究の方法

(1) 現在行われている介助技法の検証

介助技術に関する国内の文献収集及びレビューを行い、介助技法検証のための基礎的資料とする。特に介護福祉士養成テキストの介護技術が掲載されているものについては出版年次の古いものも含めて収集する。

介護福祉士資格制定から現在までの移乗動作介助に関する記述を介護福祉士養成に用いられるテキストから抜き出し移乗動作介助技術教育方法の変遷を整理する。

1.立ち上がり時の自立動作、2.様々な条件下での移乗介助動作、を中心にビデオカメラで撮影し、それらの動画データを動作解析ソフトウェアを用いて画像データとして収集・蓄積し、介護福祉士養成テキストに取り上げられている代表的介助技法について自立動作を指標として解析を行い検証する。

(2) 基礎教育用動画の作成

蓄積した動作解析映像を用いて教育用の動画を作成し、自立支援の理念を理解し、自立を支援する動作介助方法を理解するための教材映像を作成する。

(3) 「わかる」を「出来る」にするレッスンモデルの試作

上記成果による、動作解析画像を用いた動画を活用し自立支援のための介助方法を習得していくための、より効果的なレッスンモデルを作成する。作成したモデルを広く介護福祉士教育者や介護実践者に公開しフィードバックをうけて教育手法の改善を行う。

4. 研究成果

(1) 現在行われている介助技法の検証

入手できた最も古い文献は、1988年発行の介護福祉士養成テキストであり、最新のものは2014年発行の養成テキストであった。その他、DVD・ビデオ約20本、介護技術関

連文献約 55 冊を収集し、それらを用いて現在行われている介助技法の検証を行った。

介護福祉士資格制定から現在までの移乗動作介助技術教育方法の変遷を整理した。特に介護福祉士養成テキストから移乗動作介助に関する記述を収集し、分類整理した。

現在実施されている様々な立ち上がりや移乗の介助方法を先行研究論文、介護福祉士養成テキスト、介助技術解説書、教育用 DVD・ビデオ等から収集、分類整理をおこなった。それにより、介護技術に関する文献の記述内容を横断的に調査し、自立支援の観点から動作介助方法に関する記述や介助のコツに関する記述を抽出することができたこと、介護福祉士資格が制定された直後の時期(1988)に出版された養成テキストを入手し当時の介助教育内容を確認でき、20年にわたる介助技術教育の変遷をたどることができたこと、等の成果が得られた。

介護福祉士養成テキストで多くとりあげられているボディメカニクスを活用した移乗動作介助を、動作解析ソフトウェアで作成した動作解析画像を用いて自立動作と比較し、自立支援という観点から検証した結果、要介護者の動作を介助者の介助行為が邪魔し、本人の動作能力を活かせない、あるいは阻害する可能性が示唆された。従来の介護福祉士養成テキストに記載されてきた介助方法が、自立支援の観点からは不適切である可能性が示された。

(2) 基礎教育用動画の作成

自立者の端座位からの立ち上がり、要介護者の移乗動作映像を撮影し、頭部・肩峰・大腿骨外側上顆の移動軌跡画像、自立動作と介助を受けた際の動作の2画面比較画像・重ね合わせ画像などの動作解析画像を活用した自立支援の理念を理解し、本人の動作能力を活かした、自立を支援する動作介助方法を理解するための教材映像を作成する事ができた。動作解析画像を用いる事で、従来の教育用映像よりも介助時のポイントが見やすいこと、また、適切な介助の指標とした介護を受ける側の身体の動きを確認できる映像を盛り込むことができた。

また、介護現場の実務者による介助技術の習得・向上を目的とした勉強会と連携し、2012年6月～11月の毎月1回、計6回の勉強会に参加し、参加者および講師の介助動作を撮影した。現場の要望に対応し、使用頻度の高い介助技術の習得を目的とした内容の研修プログラムを共同作成した。具体的には初心者や介助動作及び熟練者の模範介助動作を撮影し、撮影したデジタルデータから動作解析画像を作成した。さらに解析画像を用いて両者の動作比較を行うことで、介助上の

ポイントが見いだされた。これらを織り込み動作習得のために有効と考えられる画像や、研修内容についての意見交換会を2度にわたって実施し、実践的なプログラム作成のために研修参加者側の意見収集を行った。

(3) 「わかる」を「出来る」にするレッスンモデルの試作

動作介助時のコツを盛り込み、動作の基本となる立ち上がり、寝返り、起き上がりの3つの動作の理解、移動に伴う重心移動の理解、移乗介助の基本技法、スライディングボードを用いた移乗の4点を盛り込んだモデル研修プログラムを作成した。

プログラム内容は、介護現場で研修等を担う実務者に提示し、その意見を取り入れて修正を加えた。動作解析結果を活用して、動作介助においてポイントとなる場面を視覚的にわかりやすく示し理解を助ける動作解析画像を加えたより実践的な研修内容を盛り込んだ。

さらに、2013年11月に現場の介護従事者20名を対象とした6時間の研修として、本研究で作成したモデル研修プログラムを実施し、参加者の反応・感想を研修終了後アンケートで収集した。これにより実務経験のある研修参加者からの意見を盛り込み、さらなるプログラム改定に取り込むことができた。また、プログラムの修正にも意見を受けた介護現場の熟練者2名も研修補助者として参加し、研修を実施した上での意見を収集し、モデル研修プログラム改定を行った。

これらの最終的な検討ととりまとめについては今後継続して実施していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(1) [雑誌論文] (計1件)

伊藤健次：“「移乗動作技術教育の変遷に関する研究 新カリキュラムにおける介護技術教育」 その1” 山梨県立大学 人間福祉学部 紀要 第6号. 71-75頁 (2011), 査読無

http://libweb.nlib.yamanashi-ken.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000002repository_khk2011008

(2) [学会発表] (計1件)

伊藤健次：“動作解析ソフトウェアを用いた立ち上がり介助の検証 できるだけ密着して介助する、は適正なのか?”、第20回日本介護福祉教育学会、2012年8月29日、「ヒルトン福岡シーホークホテル(福岡県福岡市)」

6 . 研究組織

(1)研究代表者

(2)伊藤 健次 (ITO Kenji)

山梨県立大学人間福祉学部講師

(3)研究者番号 : 70405116